

作況ニュース（第6号）

水 稲
大 豆

（発行：令和7年7月18日）（編集：令和7年7月17日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

生育はやや早い、診断に基づく穂肥を

－気象変化に対応した水管理の徹底－

－斑点米カメムシ類防除の徹底－

1 今後の気象の見通し

(1) 東北地方1か月予報（7月19日～8月18日） 【令和7年7月17日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並の確率50%です。日照時間は多い確率50%です。

週別の気温は、1週目（7月19日～7月25日）は高い確率80%です。2週目（7月26日～8月1日）は高い確率70%です。3～4週目（8月2日～8月15日）は高い確率60%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 7月22日（火）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

(1) 気象経過

【秋田地方气象台】

7月上旬：この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、気圧の谷の影響により曇りや雨の日もあり、5日は大雨の所があった。

旬平均気温は高く、全地点でかなり高い。旬降水量は概ね少なく、かなり少ない所もあった。旬間日照時間は多いまたは平年並。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (°C)	平年差 (°C)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級区分
7月上旬	26.0	+3.9	かなり高い	10.0	13	かなり少ない	55.2	118	多い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほ（7月15日）の生育概況

各地域振興局による調査では、あきたこまち（62地点）は、草丈72.4cm（平年比113%）、㎡当たり茎数454本（同88%）、葉数11.6葉（平年差+0.4葉）、葉緑素計値41.5（平年比98%）であった。平年より草丈が長く、葉数は多かった。茎数は少なく、葉色はやや淡かった。

ひとめぼれ（8地点）は、草丈72.8cm（平年比112%）、㎡当たり茎数503本（同89%）、葉数11.5葉（平年差+0.3葉）、葉緑素計値36.4（平年比96%）であった。平年より草丈が長く、葉数は多かった。茎数は少なく、葉色はやや淡かった。

表－1 定点調査結果（各地域振興局：7月15日）

品種	地区	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	71.5	103	112	469	90	87	11.6	-0.4	0.3	41.3	95	99
	中央	73.2	101	111	456	85	95	11.8	-0.1	0.5	40.5	97	98
	県南	72.8	104	114	443	90	86	11.5	-0.3	0.3	42.0	96	97
	全県	72.4	103	113	454	89	88	11.6	-0.3	0.4	41.5	96	98
ひとめぼれ	中央	72.8	103	112	503	90	89	11.5	-0.2	0.3	36.4	98	96

② 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況（あきたこまち）

本年の標植の幼穂形成期（幼穂長2mm）は、平年より3日早い7月7日だった。生育は、草丈68.9cm（平年比114%）、㎡当たり茎数456本（同79%）、葉緑素計値41.7（同100%）だった。

晩植の幼穂形成期も平年より3日早い7月11日になり、草丈69.9cm（平年比112%）、㎡当たり茎数547本（同104%）、葉緑素計値37.2（同88%）だった。

草丈は両区で平年より長く、茎数は標植ではかなり少なく、葉色は晩植でかなり淡かった。

表－2 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況

試験区	幼穂形成期	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月7日	68.9	112	114	456	65	79	11.0	-0.2	-0.1	41.7	104	100
晩植	7月11日	69.9	113	112	547	97	104	11.2	±0.0	+0.1	37.2	85	88

注1. 移植日：標植 5月15日、晩植 5月24日

注2. 調査日：標植 7月7日、晩植 7月11日

注3. 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

2) 直播栽培

①全県の生育概況

7月15日の定点調査による全県の生育概況は、草丈64.5cm（平年比113%）、m²当たり茎数588本（同94%）、葉数11.1葉（平年差+0.9葉）、葉緑素計値40.7（平年比100%）であった。平年より草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多かった。

②農試直播作況ほ場の生育概況

7月15日の農試調査結果では、草丈71.1cm（平年比120%）、m²当たり茎数500本（同82%）、葉数10.5葉（平年差+0.5葉）、葉緑素計値39.5（平年比97%）であった。平年より草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多かった。

表－3 調査結果（湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課7月15日調査）

設置場所	草 丈			m ² 当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農 試	71.1	100	120	500	96	82	10.5	+0.1	+0.5	39.5	95	97
大館市	57.4	99	109	564	103	85	11.4	+0.3	+1.3	43.8	99	107
井川町	66.3	95	115	605	77	98	11.1	-0.6	+0.9	42.0	99	104
美郷町	63.7	100	107	530	88	90	11.0	±0.0	+0.6	35.6	84	89
横手市	63.9	107	117	740	136	112	11.5	+0.4	+1.5	42.6	102	105
全県	64.5	100	113	588	100	94	11.1	+0.0	+0.9	40.7	96	100
上限	58			700			10.5			46		
目標	56	—	—	600	—	—	10.0	—	—	44	—	—
下限	54			500			9.5			42		

注1) 平年値: 過去10年間(H27~R6)の平均値

注2) 最下段は時期別目標生育量

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

予察ほ及び防除適期決定ほにおける病斑増加状況調査（7地点、いもち病接種条件）では、7月1半旬までに6地点で発病が確認された。最初に病斑が確認された日は、秋田市が6月26日、由利本荘市と大仙市が6月30日で、いずれも7月2半旬まで病斑数が急増している。同様に、湯沢市と横手市では7月3日、北秋田市では7月4日に病斑が見られている。これらの結果から全県の全般発生開始期は平年よりやや早い7月1日頃（平年7月6日）と推定された。

全般発生開始期調査（7月2半旬、21地点）では、発病地点率が19.0%（平年16.0%）で平年並、散生病斑地点率が14.3%（平年8.2%）でやや高く、坪状発生地点率は4.8%（平年8.1%）で平年並だった。散生病斑数は0.09個（平年0.04個）で多く、坪状か所数は0.03個（平年0.05個）で平年並だった。

抽出ほ場調査（7月2～3半旬、80地点）では、発病株率が0.6%（県北部1.7%、県中央部0.2%、県南部0.4%）、発病地点率が7.5%（県北部8.7%、県中央部4.0%、県南部9.4%）であった。

（令和7年7月11日発表 農作物病害虫防除対策情報 第4号を参照）

2) 斑点米カメムシ類

抽出ほ場調査（7月2～3半旬）における畦畔のすくい取り調査では、アカスジカスミカメのすくい取り数は8.6頭（平成5.6頭）でやや多く、発生地点率は25.0%（平成28.5%）で平成並だった。アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は2.0頭（平成3.8頭）でやや少なく、発生地点率は27.5%（平成41.3%）で低かった。同調査における畦畔雑草の状況別のすくい取り数では、「除草しているが、出穂しているイネ科雑草がある」や「除草がされていない」畦畔で斑点米カメムシ類のすくい取り数が多かった。水田内雑草調査では、ノビエの発生密度は高く、発生地点率は平成並だった。カヤツリグサ科雑草の発生密度は平成並、発生地点率は低かった。

（令和7年7月17日発表 農作物病虫害防除対策情報 第7号を参照）

3 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

各地域振興局による定点調査（7月15日）結果から、茎数は平年に比べて少なく、草丈は長い生育となっている。葉数も平成より進んでいるほ場が多いことから、高温により生育が前進し、減数分裂期や出穂期も早まる見通しである。茎数が少なく、中干しを遅らせて実施しているほ場もあるが、これから幼穂が成長し、イネが水分を必要とする時期に入るため、土壌水分を切らさないよう、間断かん水に切り替える。

今後も高温が続く見通しであるため、令和5年、6年のような「高温登熟」になる懸念が大きい。稲体の活力を保ち、登熟を良好にするための適正な肥培管理と水管理を行う。

また、斑点米カメムシ類の防除を徹底するほか、いもち病の発生状況を確認し、適期に防除する。

(1) 気象変化に対応した水管理

幼穂形成期から出穂までの水管理は稲体の活力維持のため間断かん水が基本である。中干しを十分に実施できなかったほ場では、落水期間が長めの間断かん水を実施し、田面の硬度を確保する。

減数分裂期は、数株からそれぞれ主茎を3本抜き取り50～60%以上の茎の葉耳間長が±0の日で、一般的に出穂期前10～15日頃である。なお、気象感応試験の直近10年の調査では、減数分裂期～出穂期の日数は8日と短期化しており、適期を逃さず管理する。稲はこの時期の低温に最も弱く、日平均気温が20℃以下（最低気温17℃以下）では障害不稔を発生するおそれがあるので、低温時は深水管理（17～20cm）を行い幼穂を保護する。なお、用水の水温が気温より低い場合は逆効果になるので注意が必要である。

出穂の時期は稲が水を多く必要とするので、出穂から10日間は5～6cm程度湛水して水を切らさないように管理する。

その後は、間断かん水を基本とするが、気温が30℃以上になる場合は、かけ流しを行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水や午前にかん水を行うなど、水分供給と地温の低下に努める。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消費を軽減する。（稲作指導指針p.73～78参照）

(2) カドミウム含有米の発生防止

カドミウム含有米の発生が懸念される地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、カドミウムの吸収を抑制するために、出穂前後各3週間は常時水を張り、田面が空気に触れないようにする。(資料編p. 23参照)

(3) あきたこまちの出穂期の予測 (7月15日現在)

7月16日以降の気温が平年並で経過した場合や平年より2℃高く経過した場合の中苗移植のあきたこまちの出穂期は、発育モデルにより表-4のとおり予測される。近年は、実際の生育の方が予測より速く進む傾向にあるため、予測日を目安にし、ほ場観察により生育を見極め、追肥や病虫害防除等の栽培管理を適期に実施する(資料編p. 19~20参照)。

表-4 中苗移植のあきたこまちの出穂期予測 (想定気温別)

各地域の移植盛期	アメダス 観測地点	7月16日以降気温「平年並」		7月16日以降気温「平年+2℃」	
		減数分裂期	出穂期	減数分裂期	出穂期
県北 5月24日	大館	7月23日頃	8月2日頃	7月23日頃	7月31日頃
県中央 5月21日	大正寺	7月24日頃	8月2日頃	7月23日頃	7月31日頃
県南 5月25日	横手	7月21日頃	7月30日頃	7月21日頃	7月29日頃

(4) 生育・栄養診断に基づいた穂肥 (資料編p. 20~22参照)

減数分裂期の追肥の要否は、基本的に幼穂形成期に実施した栄養診断結果に基づいて判断する。

幼穂形成期の生育・栄養診断でI~IV型の生育型に該当した場合は、減数分裂期に窒素成分で2kg/10a追肥する。ただし、減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合は、早めに追肥する。V-1、V-2型の生育型に該当する場合は、ムラ直し程度に窒素成分で1kg/10a追肥する。なお、過剰な追肥や出穂期に近い追肥は、玄米のタンパク質含有率を高め、食味の低下につながることに注意する。

令和6年に続き、草丈が長く経過していることから、節間の伸長が懸念される。葉色が濃く、幼穂形成期の栄養診断により倒伏程度が2以上に判定された場合には、やむを得ぬ緊急手段として倒伏軽減剤の使用を検討する。(稲作指導指針p. 75参照)

※高温登熟対策としての追肥 (栄養診断により追肥不要と診断されたほ場を対象)

本年は8月も高温が続く見通しであり、高温登熟(白未熟粒など発生)の対策として、減数分裂期の葉色が理想生育の下限値を下回るほ場では、減数分裂期に窒素成分で1kg/10a以下の追肥を検討する。なお、基肥全量施肥(いわゆる基肥一発施肥)の場合でも、葉色が急に低下し、下限値を下回ったほ場においては、緊急措置として同様の追肥を検討する。(稲作指導指針p. 121~124参照)

<「あきたこまち」における減数分裂期の葉緑素計値の理想値(下限)>

県北	中央	県南
3.8	3.6	3.7

「減数分裂期」: 数株からそれぞれ主茎を3本抜き取り50~60%以上の茎の葉耳間長が0の日

(5) いもち病防除

1) 葉いもち

- ① 葉いもちが発生しているほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）で防除する。

2) 穂いもち

- ① 葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤、またはゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤の散布を行うか、出穂直前と穂揃期にトライフロアブル、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかの茎葉散布を行う。
- ② 葉いもちが多発しているほ場では、上述の①に加え、さらに、傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。
- ③ 育苗施設内外の衛生管理や、適正な育苗期いもち防除、及び本田葉いもち防除を広域的に実施し、葉いもちの発生がない場合は、穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後にトライフロアブルまたはラブサイド剤の茎葉散布を行う。
- ④ 薬剤の使用に当たっては、テブフロキン剤（トライ剤）の総使用回数は2回以内、フサライド剤（ラブサイド剤）の総使用回数は3回以内、トリシクラゾール剤（ビーム剤）の本田での総使用回数は3回以内であることを注意する。

(6) 紋枯病防除

- 1) 前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～8日前にリンバー粒剤を水面施用する。
- 2) 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、バシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように丁寧に茎葉散布する。出穂前の防除が効果的だが、多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
(令和7年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準（以下、防除基準）p. 29を参照)

(7) 稻こうじ病防除

- 1) 前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- 2) ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- 3) Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する。

(8) ごま葉枯病防除

砂質でかつ秋落ちが認められる水田で、過去に発生履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシフロアブルで防除する。また、同水田で発生履歴がない場合でも幼穂形成期～穂ばらみ期に発生が見られた場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシフロアブルで防除する。

(9) 斑点米カメムシ類防除

1) 雑草管理

- ① 畦畔・農道、休耕田・法面等の草刈りはイネの出穂10日前までに地域一斉に行う。
- ② 出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布当日から散布7日後までに畦畔・農道の草刈りを実施し、増殖源となるイネ科雑草を除去する。

2) 薬剤散布

- ① イネの出穂期を確認し、出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布を行う。薬剤は畦畔を含めたほ場全体に散布する。
- ② 出穂したホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場又は斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田等に隣接したほ場では、出穂期10日後頃の散布に加えて、同24日後頃にもエクシード剤またはクラブ剤による茎葉散布を行う。

(10) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- 1) 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- 2) 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- 3) 健康管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- 4) 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- 5) 防除履歴は必ず記録する。

(11) 農作業中の熱中症対策

- 1) 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主な指導事項
7月下旬 ～ 8月中旬	水管理 (気象変化に対応した水管理)	<ul style="list-style-type: none"> ○幼穂形成期から出穂までは間断かん水とする。出穂から10日間は湛水状態で管理し、その後は再び間断かん水とする。 ○減数分裂期～穂ばらみ期は、低温に特に弱いため、低温時（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）には深水管理（17～20cm）を徹底する。 ○出穂後に気温が30℃以上になる日は、かけ流しかん水を行う。用水の確保が難しい場合は、落水期間の短い間断かん水やかん水を午前に行うなど、水分供給と地温の低下に努める。
	生育・栄養診断の実施	<ul style="list-style-type: none"> ○減数分裂期までに極端な葉色低下が見られる場合、早めに追肥する。 ○過剰な追肥や出穂期に近い追肥は、食味低下を招くため行わない。 ○高温登熟対策のため、減数分裂期に葉色が理想生育の下限以下の場合窒素で1kg/10a以下の追肥を検討する。
	いもち病の防除 (葉いもち・穂いもち)	<ul style="list-style-type: none"> ○葉いもちが発生しているほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤、ブラシン剤）で防除し、上位葉の発病を抑制する。 ○ほ場の検診を行い、葉いもちの発病状況に応じて穂いもち防除を行う。
	紋枯病の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○前年多発したほ場に限り、出穂20～10日前にモンガリット粒剤、または出穂15～5日前にリンバー粒剤を散布する。 ○穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。
	稲こうじ病の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○前年多発したほ場では、出穂20～10日前にドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
	ごま葉枯病の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○砂質でかつ秋落ちが認められる水田で、過去に発生履歴がある場合は、出穂直前と穂揃期にノンブラスフロアブルまたはブラシンフロアブルで防除する。また、同水田で発生履歴がない場合でも幼穂形成期～穂ばらみ期に発生が見られた場合は、同様に防除する。
	斑点米カメムシ類の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○イネの出穂10日前までに農道・畦畔の草刈りを行う。 ○出穂期10日後頃に行う茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを行い、増殖源の除去に努める。 ○出穂期10日後頃にアルバリン剤／スタークル剤の茎葉散布剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。 ○出穂したホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場又は斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕地等に隣接したほ場では、1回目の防除に加えて、出穂期24日後頃にもエクシード剤またはキラップ剤による茎葉散布を行う。
	農薬飛散防止と安全使用	<ul style="list-style-type: none"> ○農薬散布時は、特に周辺作物への飛散防止対策を徹底する。 ○散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。 ○健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。 ○農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。 ○防除履歴を必ず記録する。

大豆

生育に応じた適期の栽培管理を徹底

- ほ場を観察して病害虫の適期防除 -
- 雑草対策と排水対策の実施 -

1 リュウホウの生育概況（農業試験場 作況調査試験）

6月3日播種の7月10日現在の生育は、草丈53.0cm（平年比135%）、主茎節数8.8節（平年差+1.9節）、分枝数0.6本（同+0.6本）であった。

6月20日播種の7月10日現在の生育は、草丈27.1cm（平年比116%）、主茎節数4.0節（平年差+0.3節）であった。

表-1 農業試験場におけるリュウホウの生育概況

調査日	播種日	草丈(cm)			主茎節数(節)			分枝数(本)		
		本年	前年比(%)	平年比(%)	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/10	6/3	53.0	109	135	8.8	+0.5	+1.9	0.6	+0.5	+0.6
	6/20	27.1	87	116	4.0	-1.0	+0.3	0	±0	±0

1) 平年値は6月3日播種、6月20日播種ともにH27～R6のうち最大値と最小値を除いた8か年の平均値

2) 生育データはデントコーン-小麦-大豆の輪作畑における慣行栽培による

2 当面の技術対策（7月下旬～8月中旬）

(1) 最終培土

培土は、倒伏軽減や雑草防除の観点からも重要な作業であるが、最終培土の時期が遅れると畦間の耕起・かく拌に伴う断根や、管理作業機の接触に伴う茎葉損傷により生育への悪影響のおそれがあるため、培土は開花の10日前には終了する。

表-2に秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期（平年値）を示す。本年は生育が進んでおり、平年よりも開花期が早まると考えられるため、計画的に培土作業を行う。

表-2 秋田県の大豆奨励（認定）品種の開花期の平年値

播種期	品種	リュウホウ	あきたみどり
5月25日		7月23日	7月26日
6月3日		7月26日	-
6月20日		8月3日	-

※秋田農試の大豆奨励品種決定調査における平均値

5月25日播種の「リュウホウ」はH20～29、5月25日播種の「あきたみどり」はH19～28、

6月3日及び20日播種の「リュウホウ」はH27～R6のそれぞれ最大値と最小値を除いた8か年の平均値を用いた。

(2) 排水対策の徹底

降雨による停滞水が速やかに排水されるよう、明きよの点検や補修を随時行う（令和7年6月30日発行の作況ニュース第4号参照）。

(3) 病虫害防除

今後の気象に注意し、ほ場の観察による病虫害の早期発見、防除に努める（防除基準p. 51～57参照）。

- 1) 近年、カメムシ類による子実被害が増加傾向にあるため、ほ場を観察し、発生状況に応じて防除する。秋田市予察ほにおけるホソヘリカメムシのフェロモントラップへの6月4半旬から7月3半旬までの総誘殺数は21頭（平年6.6頭）で多かった。今後も誘殺数が増加することが予想されるため、発生状況に注意する。
- 2) 食葉性害虫（ツメクサガ、コガネムシ類、ウワバ類等）、飛来性害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ等）やアブラムシ類は、ほ場の観察により早期発見に努め、発生状況に応じて防除する。
- 3) ウコンノメイガは、7月6半旬にほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査し、茎当たりの葉巻数が1.3個以上確認された場合は、8月上旬までに防除する。
- 4) 排水対策を徹底して黒根腐病や茎疫病の発生を防ぐ。また、罹病株は早期に抜き取り処分し、病害の拡大を抑制する。
- 5) 紫斑病は開花期20～30日後に防除する。また、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

(4) 雑草対策

中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤により雑草防除を行う。大豆生育期処理除草剤は、薬剤によって使用時期等が異なるため使用基準を遵守し、適期に防除する（防除基準p. 349～356を参照）。

1) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草

ナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを使用する。

2) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草

大豆バサグラン液剤の効果が高い。ただし、適用品種はリュウホウに限る。

なお、大豆バサグラン液剤は、高温時や日射が強い場合、湿害等による生育不良のほ場で薬害が助長されることがあるため、散布日の天候や生育を考慮して散布する。

3) アレチウリ、アメリカアサガオ、マルバルコウ等のつる性の帰化雑草やシロザ等の広葉雑草

アタックショット乳剤の効果が高い。ただし、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後に連続した降雨が予想される場合、処理後3日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合は強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。また、大豆6葉期（ただし開花前）までに使用する。

4) 取りこぼしのあった雑草や大型化する雑草、防除の難しい雑草（シロザ・エノキグサ・ツユクサ・イヌホオズキ・帰化アサガオ類・アレチウリ等）

バスタ液剤による畦間・株間処理または大豆バサグラン液剤、ザクサ液剤、ラウンドアップマックスロードによる畦間処理を行う。また、帰化アサガオ類やアレチウリに対してはバスタ液剤またはザクサ液剤を使用する。なお、バスタ液剤とザクサ液剤の成分は同一成分として総使用回数に数えるので注意する。

畦間・株間処理や畦間処理にあたっては、薬液付着に伴う薬害を防止するため、専用の飛散防止カバーや専用ノズルを必ず使用する。

(5) 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ないが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場（土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場）や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められている。

追肥は、開花期（開花期～開花後10日頃）に硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用する。

（大豆指導指針（令和6年3月発行）p.24～27、66～69を参照）

(6) 開花期以降の土壌水分の保持

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあるため、1)、2)の対策により、大豆の好適な地下水位（40cm程度）の保持に努める。

なお、著しい高温少雨に遭遇した場合、3)、4)にある畝間かん水や明きよへのかん水等の対策があるが、十分な用水量が確保でき、速やかな排水が行えるほ場など実施可能な条件に限られるため、ほ場条件を確認した上で実施を検討する。

1) 梅雨明け後の暗きよの操作

梅雨明け後は、暗きよ栓を閉めて土壌中の水分の保持に努める。ただし、まとまった降雨がある場合は、暗きよ栓を開いて排水を図る。

2) 地下かんがいシステムが備わっているほ場について

梅雨明け後は、暗きよ栓を閉めて地下水位を40cmに設定し、降雨を土壌に貯留するように努める。

地下かんがいは、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している場合や、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。この時の地下水位は、20～30cm程度に設定し、1日給水した後、暗きよ栓を開放して排水する。

3) 畝間かん水の日安と留意点

畝間かん水は、晴天が1週間以上続き土が白く乾燥している、日中に大豆の葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見える等を目安に実施する。

30a以上の大きなほ場の場合は、ほ場を2～3区画程度に分け、1日1区画ずつ2～3日に分けて実施し、畝の崩壊と水口付近の湿害を防ぐ。ほ場（区画）全体に水が行き渡ったら水口をしっかりと止め、速やかに排水する。なお、かん水は、気温・地温が低下する朝夕の時間帯に行う。

ただし、水回りが悪いほ場や、速やかな排水を行えないほ場では、湿害等が発生することがあるため実施しない。

4) 明きよへのかん水の日安と留意点

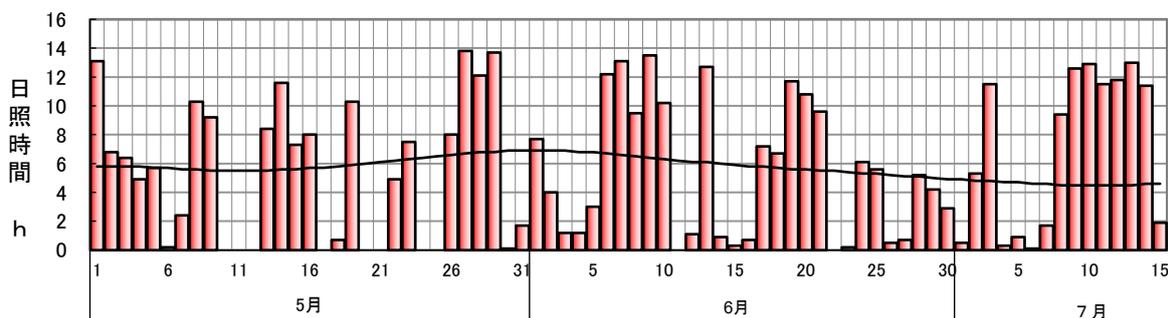
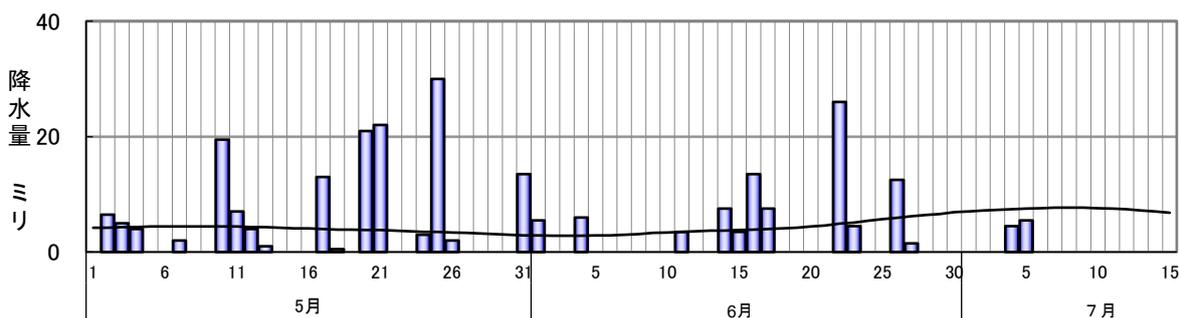
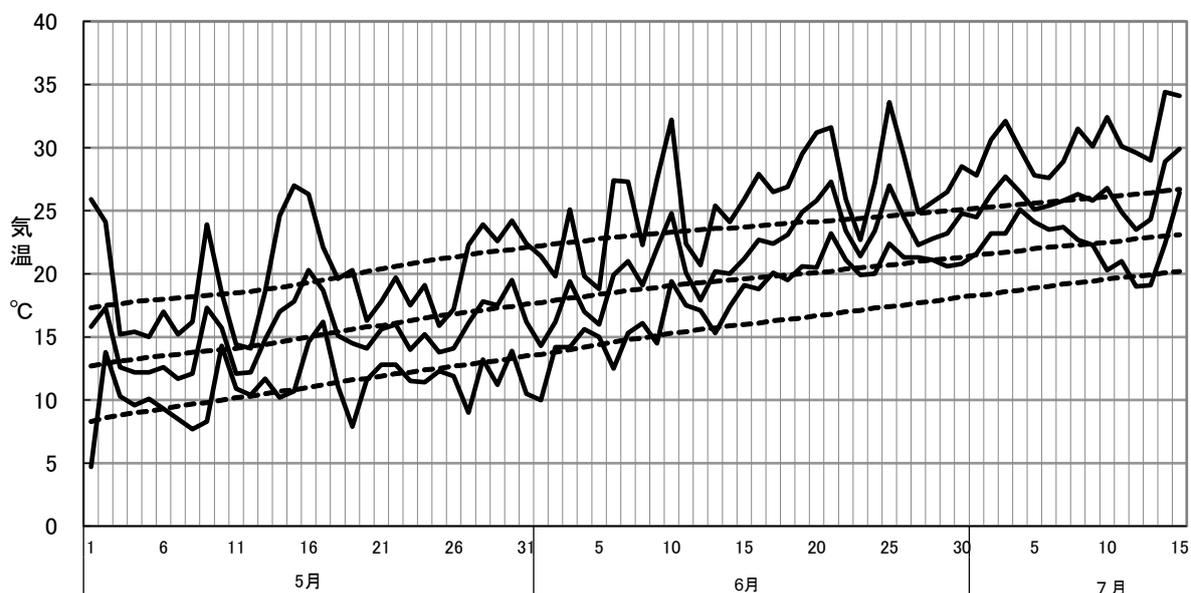
排水口を閉じ、明きよ全体に水を行き渡らせ、その後は速やかに排水する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和7年5月1日から7月15日の気象経過図（観測地点：秋田地方気象台）

（気象庁HPより）

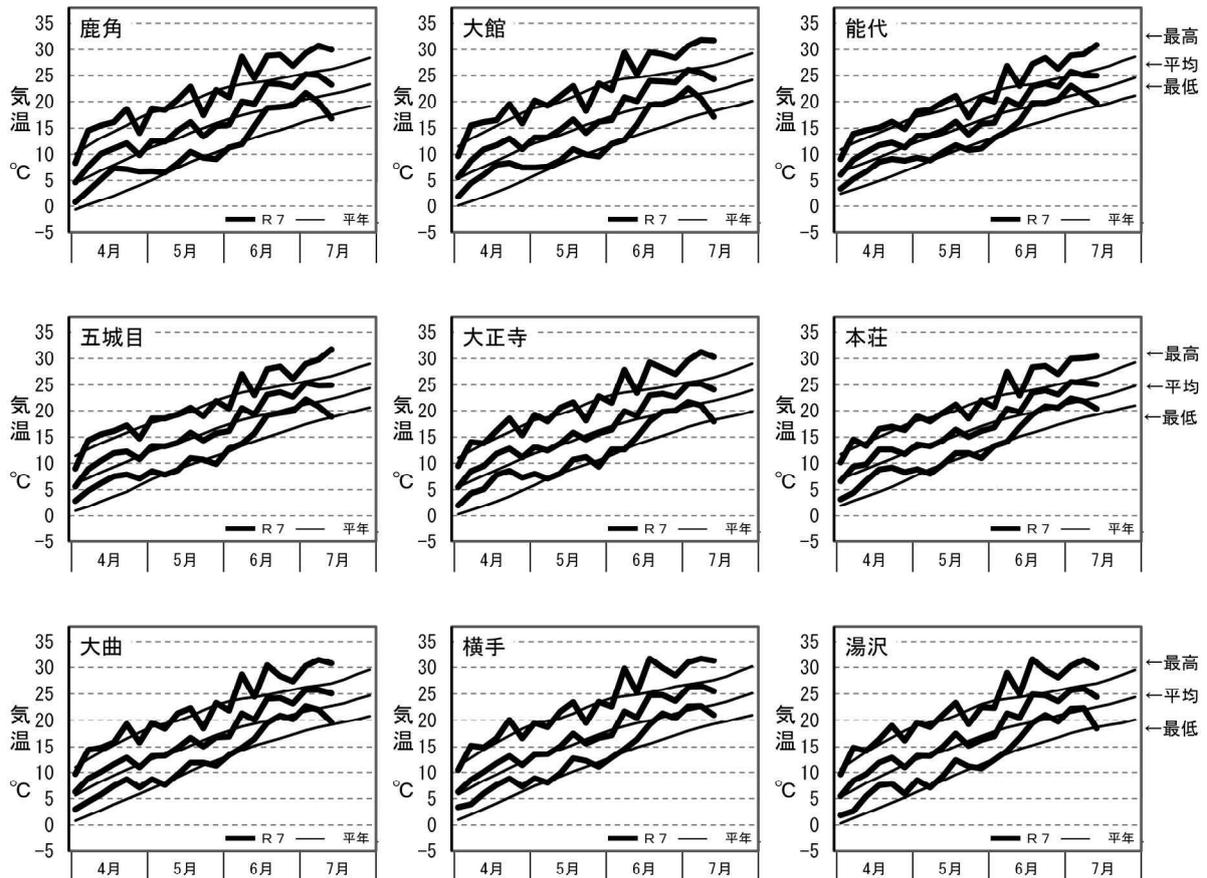


(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

項目	時期	7月上旬	
		本年	平年比較
平均気温(°C)		26.0	+3.9°C
降水量(mm)		10.0	13%
日照時間(hr)		55.2	118%

(3) 各地域の気象(各アメダス観測地点別半旬平均気温、7月3半旬まで)



2 定点調査結果（各地域振興局調査 7月15日）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	73.1	107	118	479	81	80	11.7	-0.4	0.5	43.5	98	102
北秋田	8	70.9	101	110	487	86	89	11.7	-0.3	0.3	40.1	91	97
山本	9	71.1	103	110	447	101	88	11.4	-0.4	0.2	41.1	98	98
秋田	9	73.4	101	110	451	85	94	11.9	-0.2	0.5	40.4	97	98
由利	2	72.1	104	120	476	85	97	11.4	0.2	0.7	40.7	100	98
仙北	10	73.9	106	116	455	91	89	11.5	-0.4	0.4	41.6	93	99
平鹿	11	71.8	103	112	426	83	82	11.6	-0.1	0.5	42.5	97	97
雄勝	8	73.0	104	113	450	98	88	11.5	-0.5	0.2	41.8	97	95
全県平均	62	72.4	103	113	454	89	88	11.6	-0.3	0.4	41.5	96	98
7月15日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	60	57	62	552	519	586	10.8	10.6	11.0	40	39	42
	中央	61	58	63	515	471	559	10.7	10.5	10.9	42	40	44
	県南	62	60	64	463	443	484	10.9	10.7	11.0	42	41	43

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

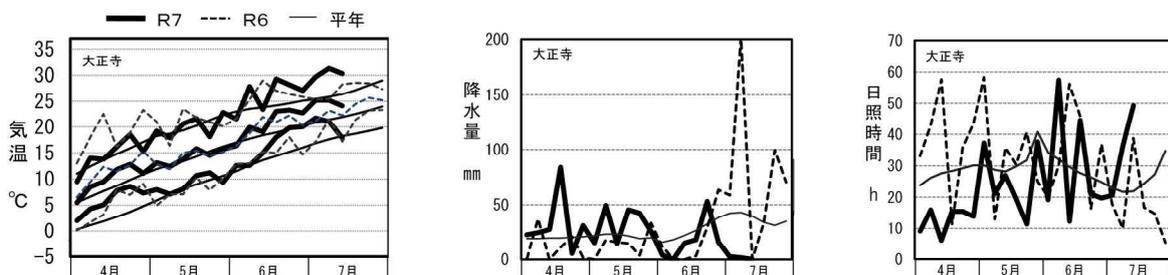
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	71.1	107	115	500	89	87	11.6	-0.1	0.5	39.0	100	100
由利	6	73.3	102	111	505	90	91	11.4	-0.3	0.1	35.5	97	95
中央地区平均	8	72.8	103	112	503	90	89	11.5	-0.2	0.3	36.4	98	96

3 関連成績

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（～7月15日まで）

6月4半旬以降、高温で経過し、特に最低気温は7月2半旬まで平年よりかなり高く経過した。7月3半旬の最低気温は平年並だったが、最高気温は高く経過した。降水量は7月以降、かなり少なく経過した。日照時間は7月2、3半旬で平年よりかなり多かった。



図－1 令和7年の稲作期間中の気象経過（大正寺アメダス観測地点、半旬別、7月15日現在）

2) 幼穂形成期（幼穂長2mm期）の生育概況（あきたこまち）

標植区の幼穂形成期は、平年より3日早い7月7日になり、草丈は平年より長く、茎数はかなり少なかった。晩植区の幼穂形成期も平年より3日早い7月11日になり、草丈は標植区と同じく平年よりかなり長く、葉緑素計値は平年を大きく下回った。

理想生育量と比べて、標植は草丈長く、茎数が少ないことから、生育量（指数）は下限を少し下回り、栄養診断値では理想生育の範囲内になった。生育型はⅢに該当し、適正な生育と診断された。晩植の生育量は、理想生育の上限を上回ったが、葉緑素計値が低く、生育型はⅣの籾数やや多い診断結果だった。

表－3 気象感応試験（幼穂形成期）の生育概況と生育診断

試験区	幼穂形成期	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月7日	68.9	112	114	456	65	79	11.0	-0.2	-0.1	41.7	104	100
晩植	7月11日	69.9	113	112	547	97	104	11.2	±0.0	+0.1	37.2	85	88
理想生育量*		58～63(cm)			471～559(本/㎡)			10.5～10.9(葉)			40～44(SPAD値)		

注) 平年値は、標植はH12～R6、晩植はH29～R6の平均。

試験区	生育量(x10 ³)	栄養診断値(x10 ⁵)	生育型(診断結果)
標植	31.4	13.1	Ⅲ型 理想生育
晩植	38.2	14.2	Ⅳ型 籾数やや多い
理想生育量	32.2～37.0	11.9～14.2(x10 ⁵)	

3) 出葉状況

標植は、8葉から11葉の出葉は概ね平年並だったが、12葉と13葉の出葉は平年より4日と3日早かった。晩植は、10葉および12葉の出葉も平年より2日早かった。

表－4 出葉期の平年比較（7月16日現在、気象感応試験）

試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15
	R6	5/23	5/30	6/4	6/9	6/14	6/18	6/25	7/6	7/14
	平年	5/23	5/29	6/4	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/18
	平年差	+2	+3	+3	+1	+1	+1	-1	-4	-3
晩植 (5月25日移植 基準)	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	
	R6	5/31	6/6	6/10	6/14	6/20	6/24	7/2	7/11	7/19
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	+1	+1	+1	+1	±0	-2	-1	-2	

注: 標植の平年値は、H12～R6までの平均。晩植の平年値は、H29～R6までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.2葉、晩植は3.5葉。

4) 幼穂長の伸長状況

標植の幼穂長1mm期は、平年より2日早い7月6日で、1mm期から9日目の幼穂長は75mmで、平年(37mm、H12~R6)よりかなり伸長している。

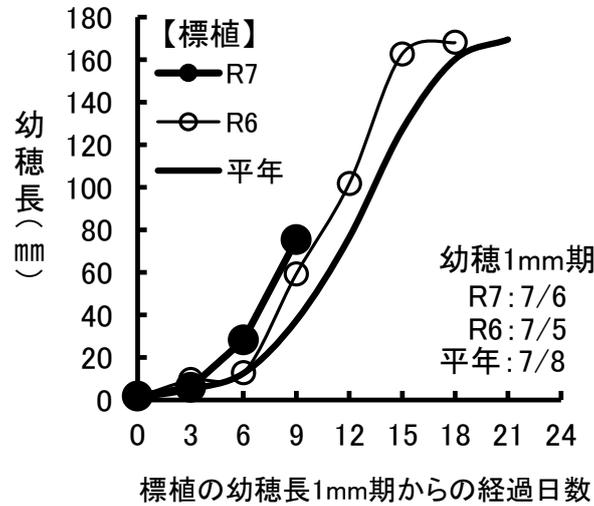


図-2 幼穂長の平年比較(7/14現在)

(2) 直播作況試験

1) 生育概況

7月15日の調査結果では、草丈71.1cm(平年比120%)、 m^2 当たり茎数500本(同82%)、葉数10.5葉(平年差+0.5葉)、葉緑素計値39.5(平年比97%)であった。平年より草丈は長く、茎数は少なく、葉数は多かった。

表-5 農試直播作況ほ場の生育概況(あきたこまち、湛水土中条播、5月9日播種)

調査月日	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年(cm)	前年比(%)	平年比(%)	本年(本)	前年比(%)	平年比(%)	本年(葉)	前年差(葉)	平年差(葉)	本年	前年比(%)	平年比(%)
7/15	71.1	100	120	500	96	82	10.5	+0.1	+0.5	39.5	95	97

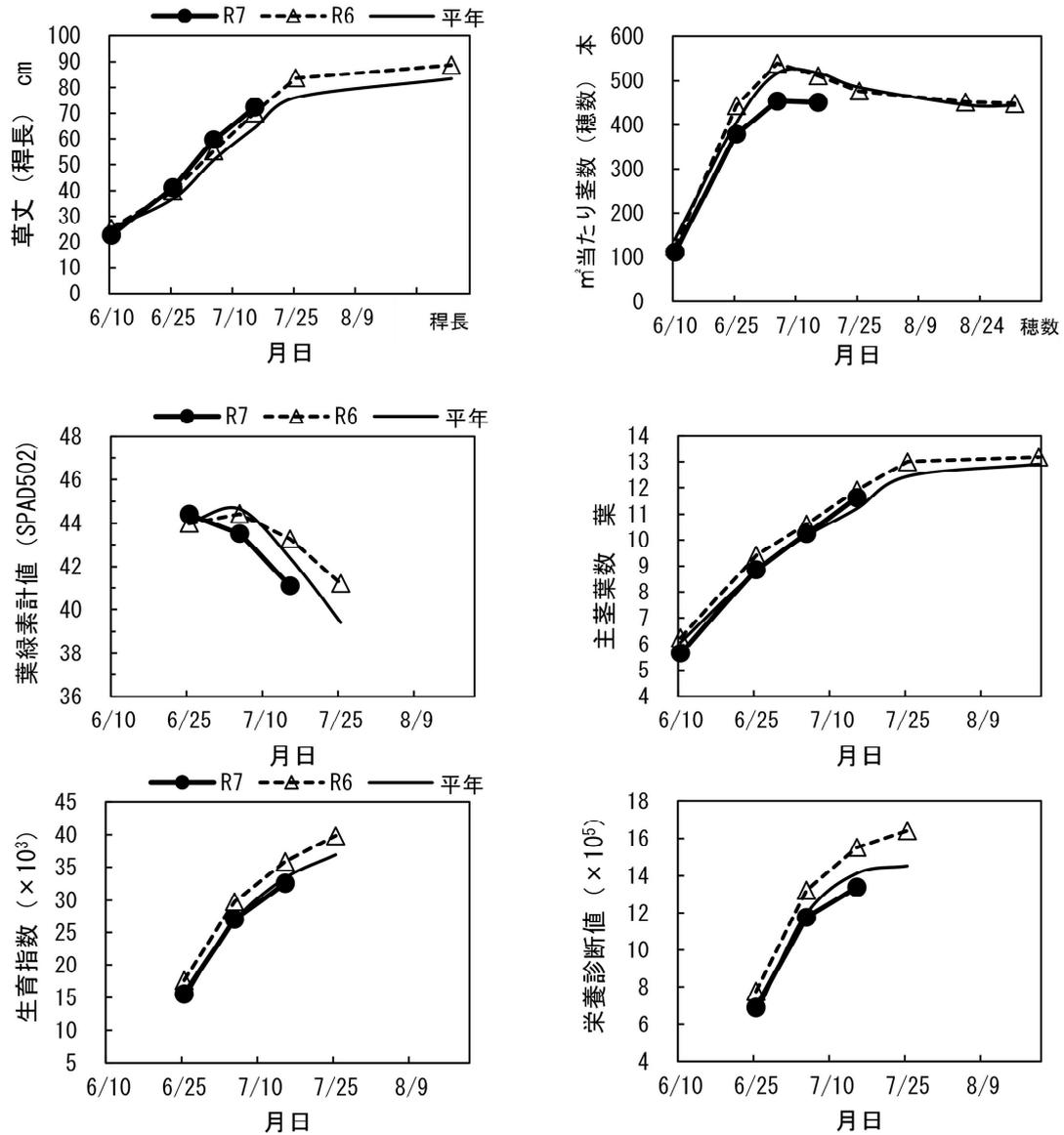
注1)平年値:過去10年間(H27~R6)の平均値 注2)中干し期間:7月4日~7月14日

4 今後の生育の見通しと栽培管理

(1) 本年の水稻生育の特徴(各地域振興局定点調査結果)

6月25日以降の全県平均の草丈は、平年を上回って経過している。一方、茎数は少なく、ほ場間差が大きい。葉緑素計値は平年よりやや低いものの、理想生育量の範囲内である。葉数は平年より多く経過しており、今後の生育ステージは、気象予報も考慮すると、早く進むと推定する。

生育指数は平年並、葉色がやや淡く、栄養診断値はやや下回っていることから、ほ場毎の稲の生育型を把握し、高温の気象予報も念頭にいれ、今後の管理を適切に実施する。



図一 3 各地域振興局定点調査（7月15日）結果（あきたこまち、全県平均）
 生育指数 = 草丈(cm) × 茎数(本/m²)
 栄養診断値 = 草丈(cm) × 茎数(本/m²) × 葉緑素計値

(2) 減数分裂期の予測（あきたこまち）

近年、実際の生育ステージは、予測より早くなる傾向にあるため、ほ場観察で生育を見極め、適期の管理に努める。

表－6 発育モデルによるあきたこまちの減数分裂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期 5月〇日	稚苗			中苗		
		7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	- 2℃	+ 2℃	± 0℃	- 2℃
鹿角	10日	7月22日	7月22日	7月23日	7月18日	7月19日	7月19日
	15日	7月24日	7月25日	7月26日	7月21日	7月21日	7月22日
	20日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月26日
	25日	7月29日	7月31日	8月2日	7月25日	7月26日	7月28日
大館	10日	7月19日	7月20日	7月20日	7月16日	7月16日	7月16日
	15日	7月22日	7月23日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月22日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
鷹巣	10日	7月20日	7月21日	7月22日	7月17日	7月17日	7月18日
	15日	7月23日	7月24日	7月25日	7月19日	7月20日	7月20日
	20日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月23日	7月23日
	25日	7月28日	7月29日	7月31日	7月24日	7月25日	7月26日
能代	10日	7月21日	7月21日	7月22日	7月17日	7月18日	7月18日
	15日	7月23日	7月24日	7月25日	7月20日	7月20日	7月21日
	20日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月23日	7月24日
	25日	7月28日	7月29日	7月31日	7月24日	7月25日	7月26日
大潟	10日	7月19日	7月20日	7月20日	7月16日	7月16日	7月16日
	15日	7月22日	7月23日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月21日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
秋田	10日	7月18日	7月18日	7月19日	7月15日	7月15日	7月15日
	15日	7月20日	7月21日	7月22日	7月17日	7月17日	7月17日
	20日	7月23日	7月24日	7月25日	7月19日	7月20日	7月20日
	25日	7月26日	7月27日	7月28日	7月21日	7月22日	7月23日
大正寺	10日	7月21日	7月22日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	15日	7月24日	7月24日	7月25日	7月20日	7月21日	7月21日
	20日	7月26日	7月27日	7月29日	7月22日	7月23日	7月24日
	25日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
本荘	10日	7月20日	7月20日	7月20日	7月16日	7月16日	7月16日
	15日	7月22日	7月23日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	20日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月21日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
大曲	15日	7月21日	7月21日	7月22日	7月17日	7月17日	7月17日
	20日	7月24日	7月25日	7月26日	7月20日	7月20日	7月21日
	25日	7月26日	7月27日	7月29日	7月22日	7月23日	7月24日
	30日	7月29日	7月30日	8月1日	7月24日	7月26日	7月27日
角館	15日	7月22日	7月22日	7月23日	7月18日	7月18日	7月19日
	20日	7月24日	7月25日	7月26日	7月20日	7月21日	7月22日
	25日	7月27日	7月28日	7月29日	7月23日	7月23日	7月24日
	30日	7月30日	7月31日	8月2日	7月25日	7月26日	7月28日
横手	15日	7月20日	7月20日	7月20日	7月15日	7月15日	7月15日
	20日	7月23日	7月23日	7月24日	7月18日	7月19日	7月19日
	25日	7月25日	7月26日	7月27日	7月21日	7月21日	7月22日
	30日	7月28日	7月29日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
湯沢	15日	7月20日	7月21日	7月22日	7月16日	7月17日	7月17日
	20日	7月24日	7月24日	7月25日	7月19日	7月20日	7月21日
	25日	7月26日	7月27日	7月28日	7月22日	7月22日	7月23日
	30日	7月29日	7月30日	8月1日	7月24日	7月25日	7月27日

注) 日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(3) 出穂期の予測（あきたこまち）

前頁と同様に実際の生育ステージは、予測より早くなる傾向にあるため、ほ場観察で生育を見極め、適期の管理に努める。

表－7 発育モデルによるあきたこまちの出穂期の予測

アメダス 観測地点	移植時期 5月〇日	稚苗			中苗		
		7月16日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	- 2℃	+ 2℃	± 0℃	- 2℃
鹿角	10日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月29日	7月31日
	15日	8月3日	8月5日	8月7日	7月30日	7月31日	8月2日
	20日	8月6日	8月8日	8月11日	8月1日	8月3日	8月6日
	25日	8月8日	8月10日	8月13日	8月3日	8月5日	8月8日
大館	10日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
	15日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月28日	7月30日
	20日	8月3日	8月5日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
	25日	8月5日	8月7日	8月10日	7月31日	8月2日	8月4日
鷹巣	10日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月28日
	15日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	25日	8月6日	8月8日	8月11日	8月1日	8月3日	8月5日
能代	10日	7月30日	7月31日	8月2日	7月26日	7月27日	7月29日
	15日	8月1日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
	20日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	25日	8月6日	8月8日	8月11日	8月1日	8月3日	8月5日
大湯	10日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
	15日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月28日	7月30日
	20日	8月3日	8月5日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
	25日	8月5日	8月7日	8月10日	7月31日	8月2日	8月4日
秋田	10日	7月27日	7月28日	7月30日	7月23日	7月24日	7月25日
	15日	7月29日	7月31日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
	20日	8月1日	8月3日	8月5日	7月27日	7月29日	7月30日
	25日	8月3日	8月5日	8月7日	7月29日	7月31日	8月2日
大正寺	10日	7月31日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月30日
	15日	8月2日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	20日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
	25日	8月7日	8月9日	8月12日	8月2日	8月4日	8月6日
本荘	10日	7月29日	7月30日	8月1日	7月25日	7月26日	7月27日
	15日	7月31日	8月1日	8月3日	7月27日	7月28日	7月29日
	20日	8月3日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	25日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月2日	8月4日
大曲	15日	7月30日	7月31日	8月2日	7月25日	7月27日	7月28日
	20日	8月2日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
	25日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	30日	8月7日	8月9日	8月12日	8月2日	8月3日	8月6日
角館	15日	7月31日	8月1日	8月3日	7月26日	7月28日	7月29日
	20日	8月3日	8月4日	8月6日	7月29日	7月30日	8月1日
	25日	8月5日	8月7日	8月9日	7月31日	8月1日	8月4日
	30日	8月8日	8月10日	8月13日	8月2日	8月4日	8月7日
横手	15日	7月29日	7月30日	7月31日	7月24日	7月25日	7月26日
	20日	7月31日	8月2日	8月4日	7月27日	7月28日	7月29日
	25日	8月3日	8月5日	8月7日	7月29日	7月30日	8月1日
	30日	8月6日	8月8日	8月10日	7月31日	8月2日	8月4日
湯沢	15日	7月30日	7月31日	8月2日	7月25日	7月26日	7月28日
	20日	8月2日	8月3日	8月5日	7月28日	7月29日	7月31日
	25日	8月4日	8月6日	8月8日	7月30日	8月1日	8月3日
	30日	8月7日	8月9日	8月12日	8月1日	8月3日	8月6日

注) 日平均気温は7月15日まではアメダス観測地のデータ、16日以降は平年値を用いた。

(4) 水稻定点ほ場のあきたこまちの幼穂形成期における生育・栄養診断

1) 幼穂形成期における栄養診断

各地域振興局による定点調査（7月15日）の結果から、概ねⅢ～Ⅳ型が多く、理想的な生育量の範囲にあった。県南はⅤ-2やⅥ型が多く、やや過剰気味のほ場が多い診断だった。

生育が平年より早く進んでいることから、追肥体系ほ場では、倒伏を考慮しつつ、また高温登熟に備え、遅れないよう追肥を行う。肥効調節型肥料入りの基肥全量施肥の場合でも、生育量と葉色の推移を見極め、必要に応じて追肥を検討する。

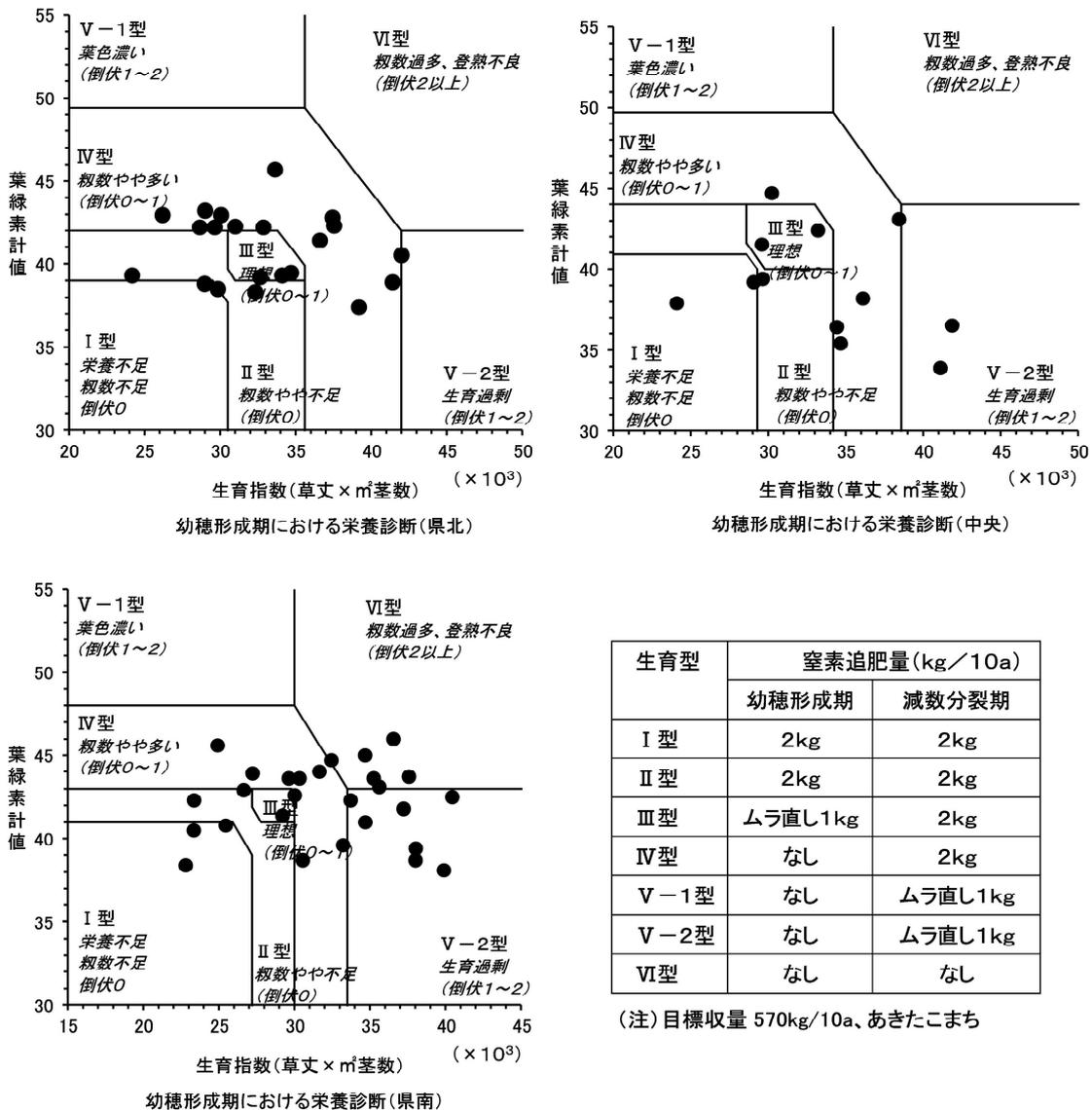


図-4 幼穂形成期頃の栄養診断（稲作指導指針p. 75～78）

※ ●プロットは水稻定点調査（7月15日）結果から地域別に図示

2) 倒伏と下位節間の関係

平成25年～令和5年において、IV節間長とV節間長の合計と倒伏の関係を見ると、IV+V節間長が15cm以下ならば近似線の上限の範囲内に入り、倒伏程度は概ね2.0以下になることが推定される(図-5)。令和7年は草丈が長く、倒伏が懸念されるものの、減数分裂期頃はIV節間長とV節間長の伸長が終了しており、下位節間の伸長が要因となる倒伏推定は、計測して確認できる。なお、令和6年はIII節間長の伸長が要因で、倒伏程度が大きくなったことから、除外して検討した。

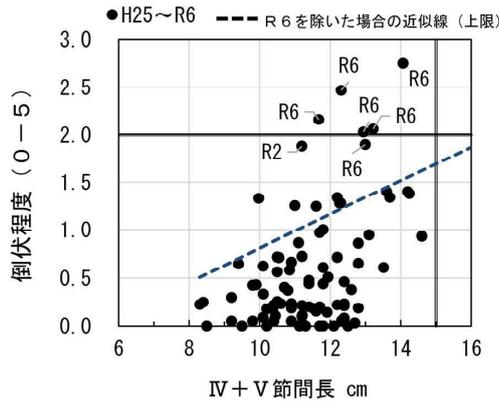


図-5 IV節間長とV節間長の合計と倒伏程度の関係(年次別、農業振興普及課別集計)

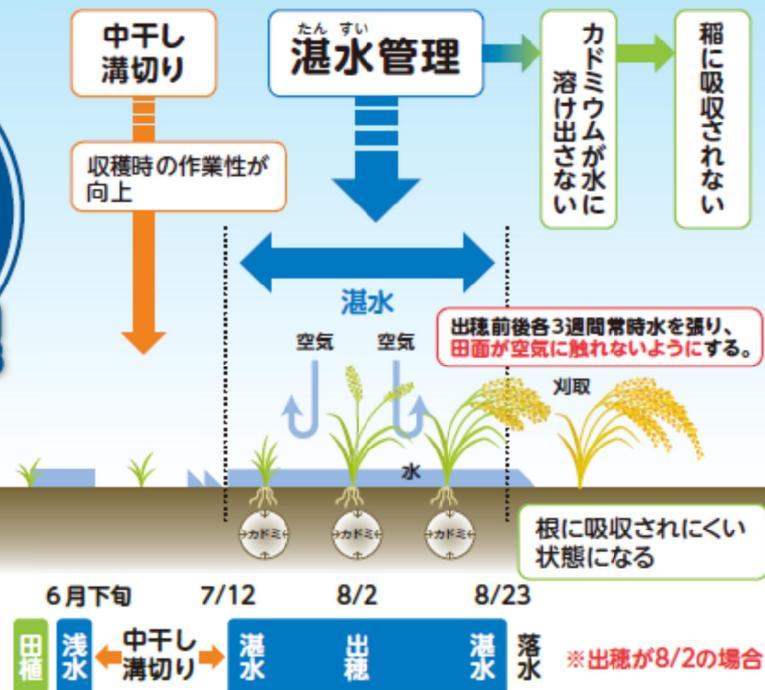
(5) 減数分裂期(葉耳間長±0cm頃)の窒素追肥

減数分裂期の目安は、止葉(n)とその前葉(n-1)の葉耳が重なる時期である。この時期は、出穂10~12日前頃に相当し、穂肥の適期である。幼穂形成期の栄養診断に基づき窒素追肥の判定を行う。

表-8 減数分裂期の地域別理想生育(稲作指導指針p.76~77)

理想生育量(あきたこまち、目標収量570kg/10a)		地域	県北 7/25	中央 7/25	県南 7/25
草丈 (cm)	上限		74	72	75
	理想		72	70	74
	下限		69	69	72
茎数 (本/m ²)	上限		529	527	454
	理想		504	491	437
	下限		479	456	420
葉数 (葉)	上限		12.2	12.2	12.5
	理想		12.0	11.9	12.3
	下限		11.8	11.7	12.1
葉緑素計値	上限		40	39	39
	理想		39	38	38
	下限		38	36	37
生育量 (×10 ³)	上限		38.4	37.0	33.5
	理想		36.2	34.4	32.3
	下限		33.9	32.2	30.8
栄養診断値 (×10 ⁵)	上限		15.0	14.2	13.0
	理想		14.0	13.1	12.3
	下限		13.0	11.9	11.7

カドミウムを
吸収させない
方法は？
湛水管理



「あきたこまちR」
以外の品種

湛水管理のポイント

- 6月下旬から「中干し」を開始！ その際、強い中干しは避ける！
- むかりやすく、水はけが悪い水田では、中干しの際に「溝切り」を実施する！
- 「出穂前後各3週間」は常時水を張り、田面を空気に触れさせない！ 完全落水は遅めにする！

※「あきたこまちR」は湛水管理が不要のため、通常の水管理を行います。

～ 汚染米が発生すると ～

基準値を超えた米は、**湛水管理の実施を条件**として、県が買入・処分を行います。
ただし、同一生産者において、汚染米が連続発生した場合、**県の買入価格が減額**となります。

- ◎ 2年連続発生 …… 通常買入価格の1/2の価格
- ◎ 3年以上連続発生 …… 通常買入価格の1/3の価格

(例) 通常買入価格が、6,000円/30kgの場合 2年連続発生 …… 3,000円/30kg
3年連続発生 …… 2,000円/30kg

(お問い合わせ先) 秋田県農林水産部水田総合利用課・地域振興局農林部・市町村・JAへ



各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

OSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

秋田県病虫害防除所

秋田地方气象台

東北農政局秋田県拠点

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

TEL 018-881-3660

TEL 018-864-3955

TEL 018-895-7303

TEL 018-860-1786

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は8月25日（月）の予定です】